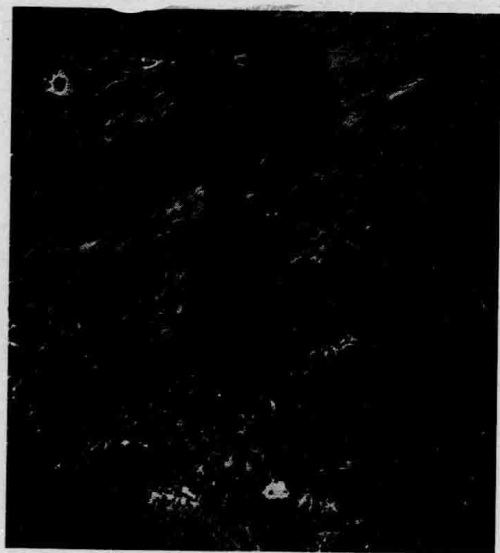


緋の道 森 万紀子



緋の道

森
万紀子



文藝春秋刊

著者略歴

昭和9年山形県生れ。山形県立酒田東高校卒

本名松浦栄子

〈著書〉 密約

黄色い娼婦

〈現住所〉 東京都中野区鷺宮 6-26-18 牧野荘 〈〒165〉

緋の道 奥付

昭和五十一年六月二十日 第一刷

著者 森万紀子

装幀者 司 修

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地 郵便番号一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

印刷 精興社 製本 大口製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次〈あけ緋の道〉

約束の日……………5

旅立ち……………27

回り道の後……………83

仲間……………117

銅貨……………175

草の中の家……………199

緋の道……………217

あとがき……………244

収録作品初出誌一覧……………246

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

緋の道

〈森万紀子創作集〉

約束の日

壁がわりに板が打ちつけられている六畳に電話は引かれた。

黒いコードは床を這い、柱まで来ると別の線になり板をくり抜き外に伸びている。

「——長いね」

類子は窓に寄り遠くに伸びる電話線を眺めた。

途中で線はどこかの線と合わさり、更に別の線に繋がり網目のように灰色の空の下を縦横に這う。

濁った空の下に棲む人々の叫びを吸い上げながら、街の動脈のように強風に揺れ、脈打って

いる。

受話器をはずしたとたん、その吸い上げられた人々の叫びが部屋一杯、こぼれ落ちそうである。

「取りはずすのは簡単かしら」

窓から離れ、類子は電話の所に戻った。

「いつ迄も料金を払わなければ、黙っていても取りはずしに来るのかしら」

「払えるかどうかわからないのですか」

十六、七歳の少年工夫は顔を上げた。取り付けが終った後、配線がうまく行かず、弛みの出たコードを最初っからもう一度付け直すため、鋺の打ち替えをしていた。

しゃがんだ作業服のジャンパーの裾から、下着がはみ出している。

「——無いや！」

いきなり少年は立ち上がった。しきりにジャンパーのポケットとズボンを探る。

「きっちりしか持って来なかったんだ。トラックから取って来ます」

「鋺がないの」

「まだ、二、三箇所打たないと。弛んでるから」

「丁寧でなくともいいわよ」

「でも、こうでしょう」

少年はくの字を描いて床に置かれたコードを持ち上げた。

「ここ、ここを止めないと、奥さんしょっちゅう足を引っかけてしまいますよ。危いです」
類子は少年を見つめた。長い間だった気がする。彼がドアの所へ去ってから、彼が、かがんでいたその場所にまだぬくもりが残っている気がした。

履こうとしている少年の作業靴は臍まで紐が付き、踵が金具で押えられたものだった。

「面倒でしょう。私のサンダルを履いて行ったら」

「小さいね奥さんの足、指三本しか入らない」

少年のかん高い笑い声が上がった。

「でも、すぐそこ迄じゃない」

早く工事が終って欲しかった。この家の少し前を横切っている大通りは、すでに仕事を終え、駅に向う人波が徐々にふくらんで来ている。今日は、あの流れの中から、男が、こちらへやって来る日である。

「——小さい小さい」

少年の笑い声と一緒に木のサンダルの不揃いな足音が乾いた粘土の空地を大通りのトラックを指し駈けて行った。

部屋の中からガラス戸を通して、外が見渡せる。夕闇が湧く地上の遙か上に、さまざまな形をした暗雲が次々と通過して行く。強風が師走の街を吹き荒れていた。

再び類子は暗雲の下に縦横に這う電話線を見た。さっきより夕暮れの騒音が激しくなった地上の流れを吸い上げ、それはふくらみを増し、うなりながら大きく脈打っている。

急ブレーキが上がった。窓際に類子はずり寄って行き、ガラスに顔をつけ外を眺めた。大通りの人群が乱れ、駈けて行く何人かが見えた。

再び電話器の側に戻った時、受話器さえはずせば、今の急ブレーキの音が、いつでも部屋の中に飛び込んで来そうである。

——電話は要らない。

ここに入居する時、類子は繰り返した。

「設備費は全部会社持ちですよ。月々の基本料金さえ、半分はこちらで持ちます」

「でも、電話は自分のものになってしまいうけでしょう」

やはり、いざ取り付けるとなると、そこに住む者の住民登録が要り、米穀通帳が必要だった。黒いコードでこの土地にぐるぐる縛りつけられた感じがする。

夕暮れの今の時間、この家を取り巻く周囲の姿が一番鮮やかに浮き上がる。かなり広い空地は大通りへ通じる一本道まで広がっており、空地の周囲は高い鉄条網が張りめぐらされ、中央

に工事中止の立札が立っている。ところどころにジャリが小山を作り、材木とセメント袋が方に積み重ねられてあった。

六畳一と間と台所、風呂場付きのこの家は作業員の休憩所として大急ぎで建てられたものだという。

「その家に昼住んでいるだけでいいですよ。人が住んでいると云うだけで、資材の盗難はかなり防げるんですって。夜は七時から、あの道は通行止めになりますから、夜は自由ですよ。盗みに来るのはみんな車で来ますからね」

「じゃあ、家の中から、ただ資材を見張ってればいいんですか」

「そうしているだけで、番人の給料が建築会社から出るんですよ。いいでしょう？」
いつも食事をしに行く食堂のおかみさんは、懸命に類子がこの家に住むことを奨めた。

「なぜ、私を？」

「やはり貴女みたいに身軽な人でないと、工事が再開した時、いつでも出て行ける後腐れのない人でないと。それに希望するなら日払いでも週払いでもやってくれと云うんですよ。貴女は適任だと思いますね」

「なぜ私が適任なんです？」

単なる客にすぎないはずだった。同じ時刻に現われ一年中同じ物を注文する、客である。

「なぜ私が？」

類子はおかみさんの目を正面から真直ぐ見つめ、繰り返した。

「見ればわかります。客商売を我々は二十年もやっていますからね」

類子は尚、彼女の目を見続けた。この食堂に来るようになって一年間通過して来たその一日の自分の姿が、その目の中に畳み込まれているのがわかる。

「こんないい仕事はないですよ。適任ですよ」

最後の仕上げをするように、おかみさんは押して来た。

「行きますよ。そこへ、明日からでも行きます」

遠くを見ながら類子は答えた。

バスに乗り、電車に乗り、おかみさんの示す、自分に適任の型へ収まりに行く気がする。

「——番人になったわ」

この家に住んでから最初に男と会った日、類子は資材の見張り人になったことを告げた。

「いいじゃあないか。セメント袋でも、材木でも、豚や牛と違って放っておいても勝手に逃げ出さないだろう」

「部屋の中から、こっちに車が来ないよう、一本道を見ればいいんだわ。ただ、眺めていればいいのよ」

それは今までと変わらない、自分の姿だった。そして一本道の向うを流れる人群も、車も、街を色取る灯の光も、広がる光景は同じである。

急ブレーキが上がった下の大通りでは、駈けて行く人々が続いていた。人の声はここ迄届かない。夕暮れの群青の無音の中を駈けて行く人の形だけが次々と通り過ぎて行く。こちらにやって来る人を見るため、類子は窓にずり寄って行った。

しかし人影は大通りの人群から外れることなく、そのまま通過して行く。

少年工夫も男もこちらにはやって来なかった。部屋の間に戻り類子は膝をかかえ目を閉じた。男がやって来る時間は、いつもまちまちだった。この家へ移る前、バス停のベンチで待ち合わせていた頃も、一時間も二時間も、遅れてやって来る。

「――何時間でも待ってんだね。君は」

男は、類子が気が付き顔を上げる迄、長身を真直ぐ伸ばしいつまでも類子の前に立っていた。「驚くべき忍耐強さだね。二時間でも三時間でも」

「ただ、こうして私は坐っているだけよ」

目の前の人山は、バスが入ると入口に殺到し崩れる。クラクションと騒音の中に自分の言葉

が飲み込まれて行くのがわかる。消えた所からまた類子は繰り返す。

「こうして、坐って、ただ目の前の人を眺めてるだけよ」

「お互いさまだ」

男は云い捨てた。それから深くベンチに凭れ足を組むと真直ぐ前を見る。

街が一日の終りに向い流れていた。

夕暮れの中にまだ冴えない灯のつぶが、点々と遙か遠くまで繋がっている。巨大な黒雲の塊りが流れて行くたび闇が降りて来、まわりに暗さがつのって行く。

人も車もすべてが一日の終りに向い大急ぎで流れて行く。

「だまってこうして動かないのは私達だけね」

目の前の信号が変わり車が一斉にスタートした時、類子は側の男に話しかけた。

「こうしてコンクリートに足を付けていると何もかもほとんど動いているのが伝わって来るわ」

男は答えなかった。

来る日も来る日も、二人で会う約束の今日まで、伝わって来るあの目の前の動きの流れの中にいたように思う。

約束のある今日まで流れて来て、今、その約束に掴まり、こうして、じっとしている。